

# 平和の使徒 John Woolman

月 地 冬 二

## は し が き

John Woolman (1720-72)を知るには、彼の日記 Journal を繙かなければならない。此の日記は愛と祈りに満ちたクエーカーの信仰生活を至純な筆致で書き綴ったものである。Charles Lamb は『エリア随筆』(The Essays of Elia)の中で、「John Woolmanの著作を暗誦するまで読め、そして初期のクエーカー教徒に愛を注げ。」と述べている。一体クエーカー派とは如何なる集団であろうか。クエーカー派の正式の名前は“The Society of Friends”即ち「友会」である。クエーカー派の始祖 George Fox は 1624 年英国 Leicester に生れた。父 Christopher は織屋で正直者であったので、隣人達から「正しい Christer」と呼ばれた。母 Mary も亦律義な婦人であった。19 才の時 Fox は精神上に由々しい変調をきたし、意気衰へ眠ることが出来なかった。彼は僧侶達や求道心の深い人々からの救助と指導を求めた。然し彼等は彼の真情に触れることが出来なかった。

“When all my hopes in them and in all men were gone, so that I had nothing outwardly to help me, nor could I tell what to do; then, O! then I heard a voice which said, “There is one, even Christ Jesus, that can speak to thy condition”; and when I heard it, my heart did leap for joy. 遂に彼の煩悶の上に光の洪水が来り、而して彼は内心の声をきいた、曰く「汝の真情に言及し得る者ただ一人あり、即ちイエス・キリストである」と。此の声は凡ての戸を開くために彼に授けられた一つの鍵であった。彼は生涯の此の時期に、神秘派の人々や予言者の生涯に特有なすば

らしい経験を持った。

教会が、死にし者或は天上高き国に座しつゝある者と示すキリストは、現に生きたまひ、生きて Fox の心のうちに生き給うことを知った。神は手を以て造った寺院に住み給はず、人の心に住み給うことを感得した。新渡戸稲造先生は、其の著「一日一言」の12月25日に次のように記している。

「天に栄光、地に平和とは、イエス降誕の節、天使の唱える讃美歌とやら、天果して何処にありや、地果して何処にありや、救世主の生れ出で賜う所は、各自の心の中にあり、栄光、平和は我を通らで流るる道なし。ただ我未だ天を知らず、嗚呼。」私共正に三思すべき御言葉である。

彼等がクエーカーと呼ばれたのは、Fox が主の御言葉に対して震動すべし、と云った処から来ていると云はれるが、又彼等が宗教的情熱に浮かされて、身体を震はすのを、嘲って云ったとの説もある。フレンドと云うのがクエーカー信徒を指す正式の名称であるけれども、クエーカーにとっては自分と同じ会員のみが友ではない。人類凡てが友である。これは人種・性・国籍・宗教・階級等の差別なく、如何なる人も同じ神の子であると信じているからである。

新渡戸稲造博士が、1926年12月ジュネーブを去るに臨み、ジュネーブ大学でなされた「一日本人のクエーカー主義観」(A Japanese View of Quakerism)なる講演は、頗る該博にして興味深きものであるから、内的光明の部分だけを引用する。

クエーカー主義の出発点は、「内なる光」この世に来る有ゆるものを照す光の存在を信ずる事であります。それは別の名で、種子・声・基

督などの名が与へられてゐます。其称は如何にもあれ、それは自らのものならぬ一つの力、吾々個々に於ける人間ならぬ人格の内在を意味します。斯様な教義は全く新しいものでなく、神秘主義の最古のものと共にあったのであります。

ジョージ・フォックスは、それが自分の発見でも発明でもない事を良く知って居りました。それは何処を問はず、有ゆる神秘家の魂を訪づれる一つの考でありました。恐らくそれは東方で一層発達したかも知れません。ソクラテスのダイモン(dæmon)は、それに甚だ類似した何かを意味して居たに違いありません。仏教はそれに通ずる多くを持って居ます。寂滅と俗に解釈される涅槃と云ふ有名な言葉は、一つの消極的な方法でそれを名指して居るに過ぎないのであります。道教は要するに其の教で終始して居ます。仏教の禅宗はそれを会得するのを目的として居ます。十五世紀の比較的新しい支那哲学者王陽明は、それを彼の哲学上の土台としたのであります。諸君は何故に、私が特にクエーカー主義に誘はれたかと云ふ事を了解されるでせう。私は子供の時、基督教の教を聞いたり、聖書や基督教の書物を読み始めた時、これ等は全く私を信服せしむるものではありませんでした。只クエーカー主義に於てのみ、東洋的思想と基督教思想を調和せしむる事が出来たのであります。

## 1. 彼の生涯と背景

John Woolman はクエーカー派の両親の血を受けて、New Jersey 州の Northampton で生れた。元来 New Jersey や Pennsylvania 地方は、William Penn の感化が広く及んでいるため、クエーカー教徒が多かった。

ここに彼の幼少の頃に起った珍らしい出来事を述べてみよう。彼は隣の家へ行く途中で駒鳥が巢を温めているのを見た。彼が近づくと親鳥は飛びたった。彼は思わずその鳥をめがけて小石を投げた処、その一つがあたって鳥はぱったり地上に落ちて死んだ。最初彼は自分の手柄に得意になっていたが、罪もない鳥を殺した事に

対して戦慄を覚えた。ひな鳥達は、養ってくれる親鳥がいなければ、必ず死ぬに違いないと思ひ、彼は木に登ってひな鳥を全部つかみ出して、殺して了った。彼は「<sup>あわれみ</sup>悪しき者は残忍を以て憐愍となす」箴言第十二章の聖書の金言が成就したと信じた。彼は使ひに出かけて行つたが、幾時間もの間自分が犯した残忍の行ひの外は殆んど何も考えることが出来なかった。

16 才の時 Woolman は放縦な仲間を好むようになり始めた。年が進むにつれて、彼の交友の数も増し、彼の生活は益々乱れてきた。彼は聖書を読むことを怠り、虚栄と気晴らしが、大きな喜びとなった。このように悪の方へ走りかけた時、神は彼に病氣を与へ、恢復の程も覚束なく思はしめる程であつた。肉体の苦痛と衰弱は甚しく、暗黒と戦慄と驚愕とが彼に襲いかゝつた。病氣の甚しい時は、神のお恵みによつて病氣が良くなるならば、つましく神の前に歩もうと誓いはしたものの、良くなるとまた不良の若者と交るようになり、恩寵を忘れて悪の生活へ逆もどりし始めた。ある夜床についた時床の傍に一冊の本が置いてあつたので、それを開くと、次の聖句が眼にとまつた。<sup>はづかしめ</sup>われらは羞恥に臥し、われらは恥辱に覆はるべし。」<sup>2)</sup>

彼にはこのことが、自分のことを云つてゐるのだと云うことがわかつた。このような思いがけない叱責にあひ、悔恨を覚えて床についたが、もまなくその悔恨を忘れてしまった。こんな風に時は経って行つた。快樂と放縦な生活を過しつつ彼は 18 才の年を迎へた。前途を思へば暗たんたるものであつた。

ある夕べ彼はしばらくの間、ある敬虔な作家の作品を読んで時を過したが、彼をこのように惑はした凡ての誘惑から解放されますようにと心をこめて祈つた。彼は倦まず撓まず礼拝に出席し、週の第一日の午後には専ら聖書やその他の良い本を読んで過した。

As I lived under the cross, and simply followed the openings of Truth, my mind, from day to day, was more enlightened; my former acquaintances were left to judge of me as they would, for I found it safest

for me to live in private, and keep these things sealed up in my own breast. While I silently ponder that change which was wrought in me, I find no language equal to it, nor any means to convey to another a clear idea of it. I looked upon the works of God in this visible creation, and an awfulness covered me. My heart was tender and often contrite, and a universal love to my fellow-creatures increased in me. Some glances of real beauty is perceivable in their faces, who dwell in true meekness. Journal, 1740.

(私が十字架を仰いで生活し、実直に真理の解明を辿ってゆくにつれて、私の心は一日一日と明るくされてきた。私の知人達が私を何と批判しようと、私は好き放題にさせておいた。何故ならば私は秘かに生活し、此等の事柄を私自身の胸の中に秘めておくのが、最も安全であると思ったからである。私は自分の内部に起った変化を静かに思いめぐらしても、他人に其に就てのはっきりした考えを伝えるにふさわしい言葉を見出せない。私は眼に見える創造物の中に、神の奇しき御業を認めた。そして畏敬の念が私の心をおおった。私の心は感じ易く、しばしば罪を深く悔いた。そして凡ての人類への普遍的愛が私の心の中に増してきた。真の柔和の中に住む人々の顔の中には、真の美しさが認められる。)「日記」1740年

20代の始めに Woolman は父の農園を去って、小売業兼製パン業者として手広く商売してゐる人に雇はれ、その人のために簿記をつけた。彼の主人はニグロの奴隷を持って居た。その当時 New Jersey に居た奴隷の数は夥しいものであったに相違ない。彼の主人は奴隷を売った。ところがその奴隷を買った人が、彼に売渡し証を書いてくれと頼んだ。全く突然のことであつた。同じ一人の人間に対して奴隷の証文を書くのだと思うと、不安になったけれども、彼は雇はれの身であり、拒みかねて相手の云う通りに其を書いた。然しながら彼の良心はこのような不幸なエピソードを忘れて了うこと

が出来なかつた。彼は売渡し証を書いているうちに、心に悩みを感じ、主人と奴隷の買手の前で、奴隷の所有はキリストの教へに反する習慣であると、彼は信ずるところを述べた。こう語って幾分心の不安はやすらいだ。後になって此のことを更に考へて、彼は奴隷売渡し証を書くべきでなかつたと云う決論に達した。

Woolman は彼の主人から洋服の仕立てを習った。時には他の人からもっと有利な仕事があると誘はれても彼はそれをしりぞけた。洋服仕立業によって彼は質素に生計を立てる事を希望した。だが彼も時には何かもっと大きな事業をやろうという野心が起らぬでも無かつた。けれども彼はイエス・キリストの天啓によって謙遜の幸福を知つてゐた。暫くしてから彼の主人の奥様が亡くなり、主人は商店の経営を止めたので、彼は主人と別れた。そこで彼は仕立業を始めた。心して礼拝や修養会に出席した。そして彼の心に福音の愛が深まってゆくのを覚えた。それと共に Pennsylvania と Virginia の奥地の植民地に居る教友を訪ねたいと思つた。幸いにも友人 Izack Andrews の同行を得て、二人は1746年3月12日州を後にした。通例辺鄙な不毛の土地の開拓に手をつける者は、貧しい部類の人々である。彼等は僅かな材料で家を建てねばならず、土地を開墾し垣をめぐらし、トモロコシを栽培し、衣服を調達し、子供等を教育しなければならなかつた。このような人々が荒野で困難と戦っている様子を見て、訪ねてきた教友達が同情を感じるのはもっともである。

1750年秋、彼の父 Samuel Woolman が熱病のために60才で亡くなった。Samuel は生前子供等に、主をおそれるように教へた。特に貧しい人々だけでなく、われわれが支配している凡ての動物に対しても優しい精神をいただくように教へた。

1763年に Woolman が訪問した Indians は Wyalusing に住んで居て、その酋長は Papunahang と云い、Woolman に劣らぬ立派な人物であつた。

Papunahang had become conscious of God and evil. He found his own heart was bad

and hard. In this situation he cried unto that powerful Being & after a long time of sorrow & perseverance in seeking help, God was pleased to reveal himself to his mind & to put goodness in his heart.<sup>3)</sup>

Indian の中にもこのような敬虔な教徒が居たことは注目すべきことである。

1756年ヨーロッパに七年戦争が起った。これはアメリカ大陸に大きな影響を及ぼした。此の年 Woolman はフレンド派の Philadelphia 年会に提出した案は、年会に於て採用された。此の案は、フレンズは他人が Indian から盗んだ土地の代価を彼等に支払うための基金を調達すべきだ、と云う趣旨のものであった。それは二つの民族間の正義に対する実質的貢献であり、北米土人に対する友情の表示であった。

遂に戦争が New Jersey に及んできた時 Woolman は若いフレンズの行為を観察する機会を得た。Woolman は彼の家に二人の兵士を宿泊させて欲しいと告げられた。思うに兵士であれ、平民であれ何人に対しても親切な接待を拒むことは、彼の本性に反することであった。結局暫く沈黙の後 Woolman は将校に対して、兵士は泊めますが、一兵士あての一週6 シリングの金は頂くわけにはいかないと云った。結局一人の兵士が実際に到着したが、彼の決心通り、支払は拒絶された。

1763 年 Woolman は、Indians を訪ねるために旅立った。此の旅行には彼の性格の美点が描写されている点で注目すべきである。

Being a rainy day, we continued in our tent; and here I was led to think on the nature of the exercise which hath attended me. Love was the first motion, and then a concern arose to spend some time with the Indians, that I might feel and understand their life, and the spirit they live in, if haply I might receive some instruction from them, or they be in any degree helped forward by my following the leadings of Truth amongst them. And as it pleased the Lord to make way for my going at a

time when the troubles of war were increasing, and when, by reason of much wet weather, travelling was more difficult than usual at that season, I looked upon it as a more favourable opportunity to season my mind and bring me into a nearer sympathy with them. And as mine eye was to the great Father of Mercies, humbly desiring to learn what his will was concerning me, I was made quiet and content. Journal, 1763.

(雨降りであったので、我々はテントの中に止まった。私は促がされて私におこった苦悩の性質について考えるようになった。愛が最初の動機であった。そしてそれから、ひょっとすると私がインディアンから幾らかの教訓を受けられるかも知れないと仮定して、彼等の生活と彼等の生活している感情を感じたり、理解することが出来るように、或は私が彼等の間にあって、真理に導かれるのを見て、彼等が少しでも向上することが出来るように、インディアンと共に暫く時を過したいと云う関心が起った。そして戦争の紛争が激しくなり、非常に雨天が多いと云う理由で、その季節にはいつもよりも旅行が困難である時に、主の御意に叶い、私が行く道が開けたのであるから私は、これは私の心を和らげ、私をして彼等に対して一層親密の間柄にならしめるはるかに都合のよい機会であると見做した。私の眼は大いなる、あわれみの父に向けられ、謙遜に、私についての父の御意を知りたいと願っていたので、私は心も安らかに満足を覚えるに至った。)「日記」1763年

Woolman は無知の Indian に対しても「愛」と「謙譲」とを以て接した。当時於ては白人が屢酒を Indian に売りつけた。Indian は此の酒をのんで理性の働きを奪はれ、そのために白人との間に喧嘩口論が度々起った事を思う時、Woolman の土人に対する態度は誠に立派なものであると思ふ。Woolman は全く愛の人であった。Indian に対するクエーカー派の態度とイギリス植民者のとった態度との間には、著しい差異がある。クエーカー派の優勢であっ

た頃には、此の派の者は一人も Indian によって殺されたものは無かったと云はれている。Woolman の時代に於てもクエーカー教徒は無防備で歩きまわることが出来たが、長老教会派 (Presbyterian) の牧師は片手に聖書もう一方の手に銃<sup>4)</sup>を握って説教壇に立った、と伝えられている。

1771年4月に Woolman の一人娘 Mary が The Mount Holly の礼拝堂に於て John Comfort と結婚した。然し彼女の第一子が生れる前に (1772年6月) Woolman は彼の最後の旅に出発して、それから彼は帰らなかった。彼はかねがね英国の北部、特に Yorkshire のフレンドを訪ねたいと思っていた。1772年5月1日彼は、クエーカー所有の The Mary and Elizabeth 号で出帆した。船主及び仲間の驚いたことに、Woolman は三等で旅行することを申し出た。恐らく此は贅沢や無駄の出費に反対しての事であろう。平素 Woolman に好意を寄せていなかった一人のフレンド教徒でさへ、英国のフレンド教徒あての手紙の中で、次のように温く Woolman を推薦してゐる。

“He is a Friend in good Esteem among us, of blameless Life, a good understanding, and deep in spiritual Experience, tho' singular in his Dress and deportment. Is not a Censorious Mind.<sup>5)</sup>...”

Woolman は非難すべき相手の人に対しても絶えざる人間的愛情を以て接したので、彼は彼等の愛と支持とを得た。“He had opponents, but no enemies.” 彼はこんな風に云はれてゐる。

1772 年の5月1日に私達は船上の人となった。私が甲板でひとりで腰を下してゐた時、私の行為は私自身の意志からなされたものでなく、キリストの十字架の力によるものであるとの満足な証拠を感じた。

概して海の旅は瞑想の時を与える。

“No man can see God and live.” This was spoken by the Almighty to Moses the prophet, and opened by our blessed Redeemer. As death comes on our own wills,

and a new life is formed in us, the heart is purified and prepared to understand clearly. “Blessed are the pure in heart, for they shall see God.” In purity of heart the mind is divinely opened to behold the nature of universal righteousness, or the righteousness of the kingdom of God. “No man hath seen the Father, save he that is God, he hath seen the Father.” Journal, 1772. (Written at sea.)

(「神を見たる者は誰も生くること能はず。」此は全能の神が予言者モーゼに宣うた言葉で、我等の祝福された救世主がこれを明かし給うた。死は我等自身の意志に基いてくるものであるから、心は清められて、「さいはひなるかな心の清き者、その人は神を見ん。」との聖句を喜んで、はっきり了解しようとしている。心が清くなると精神は神々しいまでに開かれ、普遍的正義即ち神の国の正義を見ることが出来る。神より来る者のほか、誰も父を見し者なし、彼は父を見たり。」「日記」1772年(海上にて認む)。

若い頃に鳥や獣の状態を判断することを仕込まれた Woolman は鋭い観察力を以て、みぢめな鳥達の苦しい有様を同情を以て見る事が出来た。

Some dunghill fowls yet remained of those the passengers took for their eating. I believe about 14 perished in the storms at sea, by the waves breaking over the quarter-deck, and a considerable number with sickness at different times. I observed the cocks crew coming down Delaware, and while we were near the land; but afterward I think I did not hear one of them crow till we came near the land in England, when they again crowed a few times. In observing their dull appearance at sea, and the pining sickness of some of them, I once remembered the Fountain of goodness, who gave being to all creatures and whose love extends to that of caring for the sparrows; and believe

where the love of God is verily perfected, and the true spirit of government watchfully attended to, a tenderness to all creatures made subject to us will be experienced, and a care felt in us that we do not lessen that sweetness of life in the animal creation, which the great Creator intends for them under our government. Journal, 1772.

(乗客達が自分等の食べものだと考えていた鶏の中でまだ数羽が残っていた。私は約 14 羽ばかりが航海中に後甲板に打つけた砕け波によって海上の暴風雨の中で死んでしまい、かなりの数の鶏が、別々の時に病気のために死んだ。私は船ガデラウエア河を下って来た時、又まだ陸地の近くにいた時に、雄鶏がときをつくったのを聞いた。然しその後彼等の一羽もときをつくるのを聞かなかったように思うが、ついに英国の海岸近くに来るに及んで、始めて雄鶏は又もや数度ときをつくった。鶏が海上ですっかり弱りはてている様子を見、その数羽が病気のために、やせ衰へているのを見ると、私は屢凡ての生物に命を与へ、雀達にさえその愛を及ぼし給う徳の泉なる創造主を思いおこした。神の愛が真実に完成され、支配の真の精神が心して留意されるところでは、我々に従うように作られた凡ての生物に対する慈愛が経験されるであろう。そして大いなる創造主が我々に支配せしめようと思し召される動物の生活の楽しさを傷けないようにとの主の御心づかいが、我々のうちに感じられると私は信ずる。)「日記」1772

London に着くと Woolman は直ちに Gracechurch Street にある礼拝堂に赴いた。そこでは丁度年会が開かれていた。年会を終えてから彼はロンドンから北部の旅に出かけた。彼は Hertford の四季会に出席し、そこから徒歩で町や田園生活を詳細に視察した。

1772 年 Woolman は教友 Thomas Priestman の家で病気になり、同年10月7日神の御前に召された。病気は天然痘であったと云はれてゐる。

## II Gandhi と Woolman

Gandhi (1869—1948) はインド建国の父と云

はれている。18才の時イギリスに留学して法律を学んだ。24才の時訴訟事件を依頼されて南アフリカ連邦の Durban に渡った。当時南アフリカには約7万にのぼるインド人が移住していたが、彼等は白人達からひどい迫害を受けていた。この有様を見て彼は南ア政府当局に対し、人種差別反対闘争を起し、その指導者となった。

Gandhi は「インドの自治」の中で、金銭を罵倒し、金銭の本質である労働を尊重した。タゴールとの論戦の中で、飢えたる人々が食を得るように、仕事を与えよ。食うために働く必要のない私が、なぜ糸を紡ぐのかと人はたずねる。其は私が自分に属しないものを喰べているからである。私は同胞達を掠めて生きている。あなたの懐中に入ってくるどの貨幣の跡でも探してごらん下さい。あなたは私の言うことが真実なのを見るでしょう……糸は紡がなければならぬ。何人も紡ぐべきです。……今日ではそれが義務である。明日のことは神がおも<sup>(9)</sup>んばかっている。」

Gandhi は自ら紡いだ手織木綿を着用し、染料を使用しなかった。Woolman も衣服の簡素を説き、なるべく灰色の布地を用いることをすすめ、有害な染料で衣類を染めることに反対した。又 slave plantation から産出された食品の使用をやめた。両者の間には一脈相通ずるものがあるように思はれる。

1924 年 Gandhi が 24 才の時インド教徒とマホメット教徒の間に紛争が生じた。彼は之を防止するために、21日間の断食を行ひ、声明書を発表した。その主なる趣旨は、

“I believe in the absolute oneness of God and therefore of all humanity…the rays of the sun are many through refraction, but they all have the same source. I cannot therefore detach myself from the wickedest soul… I must involve all mankind in my own experiment.” (i. e. in my efforts to purify myself and to help others to become<sup>(10)</sup> pure).

(私は神と全人類の絶対的同一性を信ずる大

陽の光線は屈折によって数は多くなるとも、それらは皆同じ源から出ている。それ故に私は極悪人と雖もそのそばを離れることは出来ない。私は全人類を私自身の実験（即ち自らを浄め他人を助けて清浄ならしめる努力）の中に包含しなければならない。）

In a time of sickness with the pleurisy, a little upward of two years and a half ago, I was brought so near the gates of death, but I forgot my name. Being then desirous to know who I was, I saw a mass of matter of a dull gloomy colour, between the south and the east, and was informed that this mass was human beings in as great misery as they could be, and live, and that I was mixed in with them, and henceforth I might not consider myself as a distinct or separate being. In this state I remained several hours. I then heard a soft melodious voice, more pure and harmonious than any voice I had heard with my ears before; and I believed it was the voice of an angel, who spake to the other angels. The words were "John Woolman is dead". I soon remembered that I once was John Woolman, and, being assured that I was alive in the body, I greatly wondered what that heavenly voice could mean. I believed beyond doubting that it was the voice of an holy angel, but as yet it was a mystery to me. Journal, 1772.

（二年半余り前、私は肋膜炎を病んで、死の門のすぐ近くまで連れて行かれて、自分の名前も忘れてしまった。それで自分が誰であるか知りたくなって、見るともなく見ると、南方と東方との間に、鈍い陰うつな色をした大きな塊を見た。その塊は人間として存在し得る限り、生き得る限りの大きな苦難のうちにある人間であって、私は彼等とまぜ合はされたので今後私自身を別物の分離した人間と考へてはいけなさと教へられた。こんな状態で私は数時間とどまっていた。私はその時此の耳でききたいかなる声

よりも清らかで快い柔らかで調子の美しい声をきいた。私はそれは確かに一人の天使が他の天使に話している声だと思った。

その言葉は「ジョン、ウルマンは亡くなった」というのであった。私はやがて自分がかってジョン・ウルマンであったことを思い出した。そして私は肉体で生きていることが確信出来たので、私はあの神々しい声は何を意味するのであったかと、大いに不審に思った。私は無論あれは聖い天使の声であると疑ひなく信じたが、それでも私にとっては神秘であった。)[「日記」1772

Woolman が心がけた第一のことは、自分自身の魂であり、自分自身を神にまかせることによって自分が人類を包含する普遍的愛に結合されているのを知った。それゆえに Woolman は不幸な人々を見れば、自分は彼等から離れた別個の存在と考へることは出来ないのである。

"John Woolman is dead." 此の言葉は、「彼自身の意志の喪失」に外ならないことを彼は知った。

Woolman が「日記」の中で次のような見解を述べていることは注目すべきことである。

I have been informed that Thomas à Kempis lived and died in the profession of the Roman Catholic religion; and in reading his writings, I have believed him to be a man of a true Christian spirit, as fully so as many who died martyrs because they could not join with some superstitions in that church.

All true Christians are of one and the same spirit, but their gifts are diverse, Jesus Christ appointing to each one their peculiar office, agreeable to his infinite wisdom. Journal, 1757.

トマス・ア・ケンピスがローマ・カトリック教の信条を告白して生活し、その信仰のために死んだということを私は聞いている。彼の著作をよんで、私は彼が真のキリスト教の精神の人であると信じた。かのローマ・カトリック教会内に於ける迷信を信ずることが出来なかった為に殉教者として死んだ多くの人々と全く同じ

であると思った。凡ての真のキリスト教信者は全く一つ心であるけれども、彼等の才能は様々である。イエス・キリストは各々の無限の知恵に従って、各人に夫々特有の職務を指し示している。)「日記」1757. 誠実で心の清い人々は、場合によっては、夫々の属する宗派の重荷を背負はされていても、皆同じ宗教を持つ人々と云へよう。Gandhi に於ても、Woolman に於ても此の事は真実と云へよう。

William Penn は若き時、「世に勝つ信仰があり、世に勝たるる信仰がある。」との友会の説教を聞いて、クエーカーになった云はれている。Penn によれば、謙譲で、従順で、情深く、正しく、敬虔で、信仰深い人間は、何処の人間であろうとも、皆同じ宗教を持つ人間である。それ故、此の世ではそのまとう異った制服の故に知らない人となっていて、死がマスクを取外す時、お互は知合っているのだ、<sup>(11)</sup>と。

### III 奴 隷 問 題

クエーカー派の始祖 George Fox は1671年 Barbados 島に於ける友会員の総ての奴隷所有者に対して、寄る辺なきニグロ人等の福祉に注意を払ふべきことを勧告した。Fox は皮膚の色の如何に拘らず全人類は同胞なりとの全く新しい観念を表明した。当時は戦争俘虜、罪人等を外国に移住させて、奴隷として使役したのである。

Woolman は1742年に、未だ店員として働いていた頃、一人の黒人の女を売却するための証書を作製するよう頼まれたことがあったが、その時に浮んだ疑念が、彼をして、一生涯を奴隷解放運動に捧げるようにせしめる端緒となった。

1750 年彼の父は病重く、病床にあって、Woolman に奴隷制度に関する彼の原稿を印刷するように勧めた。彼はその時以来各所の年会に於て訴へた。1758 年 Woolman は Philadelphia の年会に出席し、最も厳粛な訴へをなした。覚書が満場一致で採択され、奴隷所有者の友会員等、「奴隷を解放して彼等のために、基督者の処置を講ず」べきことを勧告すること

になった。

今彼の「日記」の中から奴隷に関する重要な章句を抜き出してみよう。

Woolman は Maryland 州を旅行して Virginia の Ceder Creek の教友を訪ね、更に Camp Creek へと旅をつづけた。彼は此の旅行中に書き留めた覚書によって、旅の印象を書いた。

Many of the white people in those provinces take little or no care of Negro marriages; and when Negroes marry after their own way some make so little account of those marriages that, with views of outward interest, they often part men from their wives by selling them far asunder, which is common when estates are sold by executors at vendue. Many whose labour is heavy, being followed by a man with a whip, hired for that purpose, have in common little else allowed but Indian corn and salt, with a few potatoes. The potatoes they commonly raise by their labour on the first day of the week. The correction ensuing on their disobedience to overseers or slothness in business is often very severe, and sometimes desperate.

Men and women have many times scarce clothes enough to hide their nakedness; and boys and girls, ten and twelve years old, are often stark naked amongst their masters' children. Some of our Society, and some of the Society called New Lights, use some endeavours to instruct those they have in reading; but in common this is not only neglected but disapproved. These are a people by whose labour the other inhabitants are in a great measure supported, and many of them in the luxuries of life. These are a people who have made no agreement to serve us, and have not forfeited their liberty that we know of. These are souls for whom Christ died; and for our conduct toward



them we must answer before that Almighty Being who is no respecter of persons.

They who know the only true God and Jesus Christ whom he hath sent, and are thus acquainted with the merciful, benevolent, gospel spirit, will therein perceive that the indignation of God is kindled against oppression and cruelty; and in beholding the great distress of so numerous a people will find cause for mourning. Journal, 1757.

(それらの州の白人はたいてい黒人の結婚に殆んど、いや全く注意を払はない。黒人が彼等なみに結婚すると、ある人達は彼等の結婚に重きをおかずただ面白半分の考えから、時には彼等を離れ離れに売り払って、夫と妻との間を裂く。こうしたことは管理人が競売で財産の売立をするような場合に起りがちである。重労働に服する多くの黒人が、農園で働く時には、彼等は奴隷監督のために雇はれた鞭を持った男に付き添はれていて、普通とうもろこしと塩と少しばかりの馬鈴薯の外には殆んど何も食物は与へられない。その馬鈴薯も週の最初の日、彼等が普通、自ら働いて作るものである。彼等が監督の云うことをきかなかったり、仕事をなまけたりしたときの懲罰は、屢非常に苛酷であって、時には生命にもかゝるような事がある。

男も女も、度々、其の身体を包むだけの着物にも事欠き、10才から12才の男の子、女の子は、しばしば御主人の子供達の間で真裸である。我等の教派のある者、そしてニューライツと呼ぶ教派のある者は自分達の所有している奴隷に読むことを教へようと幾らか努力している。然し通例こうしたことは等閑に付されている許りでなく非難されている。これらの黒人は自分達の労働で、他の人々を大部分支へているのであるが、彼等の多くは贅沢な生活をしている。これらの黒人は、我々のために働くに当って、何等の契約も結んでおらず、我々が彼が持っている知っているその自由を罰として失ってはいない。これ等の者こそその為めにキリストが身を献げた人々なのだから、彼等に対する我等の行為については、依怙ひいきなどをなさ

らぬキリストの御前に、我々は贖ひをしなければならない。唯一の真の神と神が送り給へるイエス・キリストを知っていて、このように、あわれみ深い、仁慈の、福音の精神によく通じている人々は、その点で、神の怒りが圧制と残虐とに対して燃え上り、かように夥しい人々の人きな苦悩を見て、悲嘆の原因を見出されるであろうことを感知するであろう。)「日記」1757.

Where a trade is carried on, productive of much misery, and they who suffer by it are some thousands miles off, the danger is the greater of not laying their sufferings to heart.

In procuring slaves on the coast of Africa many children are stolen privately; wars also are encouraged amongst the Negroes, but all is at a great distance. Many groans arise from dying men which we hear not. Many cries are uttered by widows and fatherless children, which reach not our ears. Many cheeks are wet with tears, and faces sad with unutterable grief, which we see not. (On loving our Neighbours as ourselves.)<sup>(12)</sup>

(多くの不幸を引きおこす傾向のある商売が行はれ、それによって苦しむ者達が数千哩も離れている場合には、彼等の苦勞を心にとめずして忘れてしまう危険は一層大きい。アフリカ海岸で奴隷を手に入れる際に、多くの子供達が秘かに盗まれる。戦争も亦彼等の間に奨励される。然しすべての事は遠く離れている。多くの呻き声が死にかけた人々から発せられるが、我々には聞えない。多くの叫び声が寡婦や父なき子供達の唇から洩れるが、我々の耳には届かない。多くの頬は涙に濡れ、顔は言ひようのない悲しみで青ざめているが、我々は其等を見るよしもない。)

Two things were remarkable to me in this journey: first in regard to my entertainment; when I eat, drank and lodged free-cost with people who lived in ease on the hard toil of their slaves, I felt uneasy;

and as my mind was inward to the Lord, I found from place to place this uneasiness return upon me, at times, through the whole visit. Where the masters bore a good share of the burden and lived frugally, so that their servants were well provided for, and their labour moderate, I felt more easy; but where they lived in a costly way, and laid heavy burdens on their slaves, my exercise was often great, and I frequently had conversation with them in private concerning it. Secondly this trade of importing slaves from their native country being much encouraged amongst them, and the white people and their children so generally living without much labour, was frequently the subject of my serious thought. And I saw in these southern provinces so many vices and corruptions, increased by this trade and this way of life, that it appeared to me as a dark gloominess hanging over the land; and though now many willingly run into it, yet in future the consequence will be grievous to posterity. I express it as it hath appeared to me, not at once, nor twice, but as a matter fixed on my mind. Journal, 1746.

(此の旅行に於て、私にとってとりわけ注目すべき事が二つあった。一つは私の受けた接待に関することであった。奴隷達を激しく働かせて、自分達は楽々と暮している人々と共に、飲んだり、食べたり、無代でそこへ泊ったりした時には、私は不安を覚えた。そして私の心が主に対して内省的になった時、私は此の不安が全旅行の間に時々募ってくるのを悟った。主人が重荷を相当分け持って担い、彼等の召使に相当の衣食を与へ、彼等の労働を程々にしてやる為めに、つつましく暮しているところでは、私は幾分安堵をおぼえた。然し主人がぜいたくな生活をして、重荷を奴隷達に負はせているところでは、私の心の悩みは大きかった。そして私はしばしば秘かにその事について、主人達と話し

合ったこともあった。第二に、奴隷を彼等の祖国から輸入する此の商売が、彼等の間で非常に奨励されていて、白人やその子供達は一般に余り働かないで暮していると云ふ事は、しばしば私の真剣な反省となった。これらの南方諸州の間では、此の奴隷売買と、このような生活方法とによって、多くの不徳行為や堕落が増しているのを見ると、私には暗い陰が国中を蓋うているように思はれた。今では多くの者がすすんでそのような生活に走るであろうが、将来子孫に及ぼす影響は悲しむべきものとなろう。私はそれを、心に映ったまゝに、一度と云はず、二度と云はず、事が私の心にふれた度ごとに述べようと思う。)  
「日記」1746年

#### IV 平和の証

クエーカー教徒の戦争反対又は「平和の証」(Peace testimony)は史上有名であり、前世界大戦、第二次大戦に於ける英米の所謂「良心的従軍拒否者」(Conscientious objectors)の主流をなすものはクエーカー教徒である。

Woolman の作品、行動について今まで観察したところでは、すべてが平和に向っての歩みであったと云へよう。キリストの霊は地上あらゆる人の心の中に宿っているという確信が、彼をして戦争参加の拒否、奴隷制度、その他あらゆる種類の不合理な圧迫に対して反対せしめた。戦争の原因となるものを探し出そうとする場合、John Woolman が指摘したように、戦争の種が我々の利己心と物質的所有物に執着する処に胚胎するかも知れない。

利己心と物質主義の暗雲を通して、人間の内的永遠のキリストの光は輝いている。その光は不滅である。万人の胸奥にあるこのキリストの光は、クエーカーの希望の根拠であり、あらゆる人種あらゆる国家の精神的和合を信ずるクエーカーの信仰の根底である。今日世界中のあらゆる国民の前途に横たわっている問題のうちで、極めて大切なものは人間の友情であろう。人間の友情を単に尊敬すべき字句に止めず、これを実践に移すこと程大切な仕事はない。Woolman はこれを身を以て実践した人であ

る。一生涯を通して、平和の使徒として活動した Woolman は単なる平和主義者でなく、身を以て実行した和解者であった。今彼の作品中から平和の証となるべき章句を引用してみよう。Woolman は North Carolina に住むフレンドに対して、1757 年 5 月 1 日に Virginia 州 Wight 島に於て次の書簡を認めた。

And now Dear Friends & Brethren, as you are improving a wilderness, and may be numbered amongst the first planters in one part of a Province, I beseech you in the Love of Jesus Christ, to wisely consider the force of your Examples, and think how much your successors may be thereby affected. It is a help in a Country, yea, a great favor & a blessing, when Customs first settled are agreeable to sound wisdom, so, when they are otherwise, the Effect of them is grievous, and children find themselves encompassed with difficulties prepared for them by their predecessors……The works of Righteousness are peace, and the effects of Righteousness are quietness & assurance forever.

Dwell here, my Dear Friends, and then in Remote and Solitary Deserts, you may find true peace and satisfaction.

(さて親愛なる友よ、兄弟よ、あなた方は荒野を拓き、州の一部分の最初の植民と見做される方々ですから、イエス・キリストの愛によって、あなた方の模範の力と、どれ程あなた方の後継者がそれによって影響されるかを、よくよく考慮せられんことを切望します。最初に固まった習慣が、健全な知恵にふさはしいものである時、一国にとって助力であり、いな更に恩恵であり、祝福であります。それが反対である場合、その結果は嘆かばしいものであり、子等達や子孫達は、父や祖父によって彼等のために残して置かれた困難に取まかれているのに気づくでせう。「正義のいさは平和、正義の結ぶ結果はとこしへの<sup>おだやか</sup>平穩とやすきなり。」<sup>(13)</sup>)

親愛なる友よ、此の点をお守りなさい。そう

すればあなた方は、遠い寂しい砂漠にあっても、真の平和と満足とを見出すでしょう。)

Our pilots took us to the house of a very ancient man. And soon after we had put in our baggage there came a man from another house some distance off, and I, perceiving there was a man near the door, went out. And he, having a tomahawk wrapped under this matchcoat out of sight, as I approached him he took it in his hand. I however went forward and, speaking to him in a friendly way, perceived he understood some English. My companion then coming out, we had some talk with him concerning the nature of our visit in these parts; and then he, going into the house with us, and talking with our pilots, soon appeared friendly and sat down, and smoked his pipe. Though his taking his hatchet in his hand at the instant I drew near him had a disagreeable appearance, I believed he had no other intent than to be in readiness in case any violence was offered to him. Journal, 1763. (The Indian Journey)

(我々の案内人は我々を老齢の人の家へ連れて行った。我々の荷物を家の中に持ち込んでしまふと直きに、少し離れた別の家から、一人の男が出てきた。彼はまさかりを毛皮外套に包んで、見えないようにして携えていた。私が近づくと彼はまさかりを片手で握った。然しながら私は近づいて行って親しい調子で話しかけると、彼は少し英語がわかることを知った。その時私の友も出てきたので、我々は此の方面に我々が訪ねてきた理由について、少しばかり彼と話をした。すると彼は、我々と一しょに家へ入ってきて、我々の案内人と言葉を交し、直きに親しい様子を示して、腰をおろし、一服吸った。私が彼に近づいて行った途端に、彼はまさかりを片手で握ったのは、いかにも不快を覚えしめる態度であった。けれども、少しでも暴行が加へられる場合には、直ぐ身構へようとする以外には、何の意向も持っていなかったのだ、

と私は信じている。」「日記」1763（イディフン旅行）

My mind being affected here with, I had fresh opportunity to see and consider the advantage of living in the real substance of religion, where practice doth harmonize with principle. Amongst the officers are men of understanding, who have some regard to sincerity where they see it; and in the execution of their office, when they have men to deal with whom they believe to be upright-hearted, to put them to trouble on account of scruples of conscience is a painful task and likely to be avoidable as much as may be easily. But when men profess to be so meek and heavenly-minded, and to have their trust so firmly settled in God, that they can not join in wars, and yet, by their spirit and conduct in common life, manifest a contrary disposition, their difficulties are great at such a time. Journal, 1757.

（此の点で私の心は動かされたので、私は新しく実行が原理と調和する宗教の真の本質に於て生活する利益を見、且つ考へる機会を持った。将校の中には、物のよくわかる人達が居て、誠実さを認めると、それに対して幾らか敬意を払ふ。将校がその職務の遂行に当って、彼等が端正な心の持主であると信じている人々を取扱う場合には、彼等を良心の苛責のために苦しませるのは、心苦しいことであろう。そして彼等は出来るだけ気楽にそれを避けるであろう。然し人々が非常に心やさしく、信心深く、神に対して深く信頼の根を下している風なので、戦争に加はることは出来ない、しかも平生の生活や心持や態度に於て反対の気質を表はしている場合には、かような時に於ける彼等の困難は大きなものである。）」「日記」1757年

Doth pride lead to vanity? Doth vanity form imaginary wants? Do these wants prompt men to exert their power, in inquiring that of others which themselves would

rather be excused from, were the same required of them? Do those proceedings beget hard thoughts? Do hard thoughts, when, ripe, become malice? Does malice, when ripe, become revengeful, and in the end inflict terrible pains on their fellow-creatures, and spread desolations in the world?

Doth mankind, walking in the uprightness, delight in each other's happiness? And do these creatures, capable of this attainment, by giving way to an evil spirit, employ their wit and strength to afflict and destroy one another? Remember then, O my soul, the quietude of those in whom Christ governs, and in all thy proceedings feel after it. Journal, 1764.

（高慢は人を虚栄にみちびくだろうか。虚栄は想像上の欲望を形作っているであろうか。このような欲望は、若し同じことが自分等に要求されたら、彼等自身御免こうむりたいことを、他人に要求し、人々を促して彼等の力を注がしめるであろうか。そのような行為は無情な思想を生み出すであろうか。無情な思想が熟すると、悪意となるであろうか。悪意が嵩じると、執念深くなり、つひには同胞に恐い苦痛を加へ、世界に破壊をもたらすであろうか。

正義に歩む人間は、お互の幸福を喜んでいであろうか。かる境地に達しうる人々が、悪霊に譲歩して、彼等の知力と能力とを、お互を悩ませ滅ぼすために用いるであろうか。それならば、わが魂よ！ キリストの支配し給う人々の<sup>おだやか</sup>平穩を思い起し、汝の凡ての行為に於て、その平穩を探し求めるようにせよ。）」「日記」1764年

Thus, lying in the wilderness, and looking up at the stars, I was led to contemplate the condition of our first parents, when they were sent forth from the garden…… But the Almighty Being, though they had been disobedient, was a Father to them and……showed them what was acceptable to him and tended to their true felicity as

intelligent creatures……To provide things relative to our outward living, in the way of true wisdom, is good; and the gift of improving in things useful is a good gift, and comes from the Father of lights. Many have had this gift and from age to age there have been improvements of this kind made in the world. But some, not keeping to the pure gift, have in the creaturely cunning and self-exaltation, sought out many inventions, which inventions of men (as distinct from that uprightness in which man was created) as in the first motion it was evil, so the effects of it have been and are evil. That at this day it is as necessary for us constantly to attend on the heavenly gift, to be qualified to use rightly the good things in this life amidst great improvements, as it was for our first parents when they were without any improvements, without any friend or any father, but God only. Journal, 1757.

(こんな風に荒野に横はり星を眺めていると、エデンの園を追はれたわれらの始祖 Adam と Eve の状態に思ひを馳せるようになった。Adam と Eve は神に従順でなかったが、全能の神は父としての至情を示し、知的創造物としての彼等の幸福を増し神に受け入れられるものを、彼等に示した。真実の知恵に基き、外部的生活に即して、我々に物を供給することは、良い事であり、有益なものを改良してゆく才能も良い賜物で、光の神からの恵みである。多くの人は此の才能を与へられた。世々此の種の改良は此の世界に於て行はれた。然しある者は純粹な贈り物を守ろうとせず、人間としての悪智恵と自惚れで、多くの発明を考へ出した。人類が創造された時の正義とは全く違うので、このような人間の発明の最初の動機は悪であったのであるから、その結果も今まで悪であった、そして今も悪である。それ故今日に於てたえず天来の賜物に心を用ひ、我々の最初の両親が、何等の改良を施さず、神おひとり以外に

は、友も父も無かった時のように、おびたしい改良の間にあっても、人生の良い物を正しく使用する機能を附与されていることが必要である。)「日記」1757年

こんな風に Woolman はアメリカ大陸の処女地に横はり、星を眺めながら、Adam と Eve が如何にして樂園から追放されるに至ったかに就て熟考した。彼の瞑想の主題は、人間的悪智恵と自惚れに根ざした所の人間の発明が如何に恐ろしいものであるかを、悟ることであった。現時に於ては様々な文明の利器があるけれど、その使用を誤れば如何に恐ろしい災害を及ぼすかを、Woolman は二百年前に喝破している。

英米に於るクエーカー教徒はその絶対平和主義のために激しい弾圧を受け苦難の道を辿ったが、彼等はそれに屈せず、絶えざる努力を続けて、その使命の達成に邁進した。

Woolman の平和思想の源流をたづねると、その始祖とも云はれる George Fox から源を発して、William Penn に至り、次で Woolman に及んでいる。此の思想は更に流れて現在の数々の勝れたクエーカーの思想に深く浸透している。然しながら私はこれらの人々の中で、特に Vining 夫人に就いて述べてみたい。

太平洋戦争が終って、占領軍が日本に上陸してくるとき、トルーマン大統領とマッカーサー元帥にあてたアメリカ・フレンド奉仕委会の公開状は、占領政策が高いキリスト教的理想主義に基くべきことを要請したが、此の公開状の筆者は Vining 夫人であった。昭和21年3月米国教育使節団一行が来日の際天皇陛下は、団長の George Stoddard 博士に対し、皇太子殿下のために適当なる米人教師推薦を御依頼遊ばされたが、この光榮ある選に入ったのは米国友会員である Elizabeth G. Vining 夫人であった。

Vining 夫人は夫Morgan氏との結婚生活後僅か四年八ヶ月で、良人の交通事故死により、一時再起を危ぶまれたが、不幸のどん底より光を求めて精神的に立直った。しかも1946年には思いがけない皇太子殿下の英語教師に選ばれて遙遙日本に赴任した。

夫人によれば「私は専ら皇太子様に英語をお

教へすると共に、又一面皇太子様のために広い世界に向って窓を開くように努力を続けてきました。成否の程はわかりません。然し私の為めにも、私を通して、他の人々の為めにも、日本そのものの上に、そしてお濠の内側の古い、厳めしい、秘められた世界の上にも、沢山の窓が開かれた事は確かです。どちらに面しているにせよ、窓からは必ず光がさしてきます。そして光は良いものだ<sup>14)</sup>と思います。」このような言葉のうちに、夫人の誠実な人柄と敬虔なクエーカー教徒としての確固たる信念が、はっきり示されています。

## む す び

Woolman は神の促しとでも申すべき衝動にかられて、遠い地方の来知の同胞に相見え、その生活の実態を知りたいと念願した。相手を知るには相手の境遇に身を置く必要がある。かくして彼は東奔西走、巡回説教師として彼の生涯の大部分を旅に過した。彼の最後の四年間の活動を思ふ時、彼は死ぬ前に福音の使者としての使命を果すために、地方の狭い州を後にして海外の広い地域に遙々赴いたと云ふ印象をうける。Woolman のイギリスへの航海中の出来事は、彼の崇高な人格の美点を表わしている。

彼は殊さら下級船室におさまって、つぶさに船員たちの苦しい海上生活を視察したり、ロンドンに着くや、直ちに開催中の年会へ馳せつけ、その奇異な服装のため、始めはひどい待遇を受けたにも拘らず、何事も神に祈って、聖霊の導きのまゝに素直であらうとする彼の態度が、相手の心を動かして、年会に受け入れられた。イギリス各地を徒歩で遍歴して酷使されてる馬や郵便配達人に同情を寄せたことも有名である。

次の章句は彼の作品の中でも、わけて勝れたものと思うので、此处に引用する。

Our Gracious Creator cares and provides for all his Creatures. His tender mercies are over all his works; and, so far as his love influences our minds, so far we become interested in his workmanship, and feel a

desire to take hold of every opportunity to lessen the distress of the afflicted and increase the happiness of the Creation.

Here we have a prospect of one common interest, from which our own is inseparable, that to turn all the treasures we possess into the channel of Universal Love becomes the business of our lives. (A Plea For the Poor)

(我々の仁慈深き神はあらゆる生物を勞りて、養いを与えたもう。主のやさしき御恵みは生きとし生けるものに遍く行きわたる。而して主の愛が我々の心に影響を及ぼす限り、我々は主の造り賜ふものに関心を持つ。かくて我々はあらゆる機会を捕えて悩める人々の苦痛を減じ、生きとし生けるものの幸福を増進することを念願とする。こゝに於て我々は、我々自身の利益もそれより離れ得ぬ所の一の共同の利益を持つことを期待する。それ故我々が持つ所のあらゆる財宝を、普遍的愛の水路に注ぎこむことは、我々の生涯の務めとなる。(貧者の為めの嘆願)

彼はイギリス各地で神の教へを説き北上して Yorkshire に赴き、York 市外の教友の家で病氣となり、1772年10月7日遂に神の御前に召された。彼の祈りの最後の言葉は、「愛」と「信仰」であった。

## Notes

- (1) Fox, George: *Journal* (Fveryman's Library) p. 8.
- (2) Jeremiah 3:25
- (3) Reynolds, Reginald: *The Wisdom of John Woolman* p. 22.
- (4) Ibidem, p. 31. 参照
- (5) Ibidem, p. 37.
- (6) Exodus 33:20 参照
- (7) St. Matthew 5:8
- (8) St. John 6:46 参照
- (9) 蠟山芳郎著「マハトマ・ガンジー」39頁
- (10) Reynolds, Reginald: *The Wisdom of John Woolman* Preface ix
- (11) 入江勇起男訳「クエーカーの真義」137 頁参照
- (12) John Woolman の *Last Essays* に含まる。
- (13) Isaiah 37:17
- (14) E. G. Vining: *Windows For The Crown Prince*. chap. 37 参照